

阿嘉島臨海研究所の2014年 (平成26年)

保坂 三郎*

熱帯海洋生態研究振興財団理事長

岩尾 研二

阿嘉島臨海研究所

The year of 2014 at AMSL

S. Hosaka* · K. Iwao

* E-mail: saburo@amsl.or.jp

慶良間が国立公園になって1年が経ちました。その影響か2014年の夏には多くの観光客が島を訪れ、那覇一座間味間の高速船は予約を取るのが難しいほどでした。これだけ多くの来訪者があると、利用される自然への負荷もかなり大きくなるため、それを調整する仕組みが必要になります。しかし、慶良間では、まだそれを受け入れるための体制ができていないとは思えません。時には利用の制限を設けてでも、自然への負荷を管理する仕組みや方法を作り上げなければ、過去に日本や世界のさまざまな場所で見られたような(あるいは見られているような)“自然の使い捨て”という結果になりかねません。国立公園という看板を掲げた以上は、行政も企業も来訪者も住民も、保全あつての利用ということを考えて早急に適正な利用のためのルール作りや仕組み作りをおこなうべきでしょう。

環境保全のための仕組み作りが必要なのは観光利用の面だけではありません。2014年夏には台風の波浪により久場島などでサンゴ群集が壊滅するなど、いくつかの海岸で被害が出ました。阿嘉新港東岸の消波ブロックや南の沖防波堤の積み上げも崩れ、同年12月から復旧工事が始まりました。また、旧港では壁面の老朽化から、その改善工事がおこなわれました。この時、それらの場所に生息しており工事によって死亡する運命にあった数多くのサンゴは、関係者の方々の努力によって、その多くを別の海域に移設して命をつなげることができました。しかし、このサンゴ移設に至る過程の多くの部分は地元

の有志や工事業者の自発的かつ献身的な働きによるもので、工事計画として当初から考えられていたものではありませんでした。

慶良間では、こうした事がこれまでに幾度も行なわれてきました。すなわち、工事の計画はずいぶん以前からあるにもかかわらず、地元住民には工事実施の直前になって内容の説明が行なわれてそこに生息するサンゴが死んでしまうことが明らかになり、工事が行なわれるまでの短い期間に(時には工事の合間をぬって)、慌ててそれらのサンゴを安全な場所に移設するというこの繰り返しなのです。もっと良いやり方はないのでしょうか。誤解のないように書いておきますが、工事を否定しているわけではありません。無用な開発工事であれば別ですが、人の生命や財産を守るための工事であれば行なうべきだと思います。しかし、工事の結果死んでしまうサンゴやそれを中心とした生物群集もまた地元の財産なのです。「工事地点はダイビングポイントでもなんでもないので、そんな価値はない」という人もいるかもしれませんが、生態系の中でのつながりがあり、それらのサンゴや他の生物から生まれた次世代が周囲に広がっていくことを考えると、それらはやはり地元の貴重な財産と言えるでしょう。

工事とサンゴの生存とは、かならずしも相反するものではありません。確かにすべてのサンゴを死なせずに済ませるのは難しいでしょうが、先述のように周囲の生態系や未来へのつながりが強い大型群体を中心に可能な限り多くのサンゴを移設するだけでも、意味は大きいと思い

ます。そして、そのために必要なことは、工事計画の段階でそこにサンゴ群集が存在していることを考慮に入れることだけです。

沖縄県だけを問題にするわけではありませんが、例えば沖縄県は平成 23 年度から「サンゴ礁保全再生事業」を進めており、座間味村でのサンゴ群集再生に取り組んでいます。そのいっぽうで先に挙げたサンゴを死亡させる 2 つの工事の発注者も沖縄県であることには、率直に矛盾を感じます。この行き違いを修正する方法は、工事予定地にサンゴ群集があることを関係者や関係部署のすべてが共通に認識し、連携してその対策を講じることです。特に、国立公園となった慶良間での工事計画については、国、県、村の各行政と住民とが早い段階で話し合いを持つことが必要ではないでしょうか。

今後は、①計画の段階で現地調査を行うとともに地元住民からの情報を集めて行政と住民とで移設すべきサンゴがあるのか、あるとすればその量はどのくらいなのかを協議し、サンゴ移設の計画を検討する時間を確保すべきでしょう。

これまでの工事の際には、理解のある工事業者に杭や水中ボンドなど必要な資材を提供してもらい、地元ダイビング協会が手弁当で潜水作業を行ってサンゴを移設してきました。こうした関係者の献身的な気持ちは大

切なものですが、特に地元への負担が少なくありません。そこで、②サンゴ移設が必要であれば、工事計画の中に移設を含めた予算(調査費、移設作業費、移設後のモニタリング費、移設計画検討のための費用など)を確保しておかなければならないと思います。

実際のサンゴの移設においては、移設方法や移設先の選定など様々な情報や技術が必要になります。それらについては、地元で長年研究を重ねて蓄積してきた阿嘉島臨海研究所の知見や経験を十分に活用してもらいたいと思います。

2014 年も阿嘉島臨海研究所は、サンゴの移設にも関連するサンゴ群集修復技術やさんご礁生態系保全についての研究をおこなうとともに、そうした知見を多くの人に知ってもらい、また、技術を習得してもらうためのさまざまな取り組みを行いました。それには、日本財団(笹川陽平会長)をはじめとして、たくさんの方たちや組織にご助成とご協力をいただきました。誌面を借りて深く感謝いたします。次年度には、ビジターセンターの建設など国立公園の管理・運営事業がさらに進展しますし、エコツーリズム全体構想に沿った動きも活発になることを期待しています。私たちも、これまでも増して、海域の保全についての取り組みに力を注ぎたいと思いますので、さらなるご支援をよろしく願いいたします。

2014 年(平成 26 年) 阿嘉島臨海研究所の 1 年間の動き

List of research activities at AMSL by visitors and staff members in 2014

●主な利用者と研究課題など(敬称略)

- 3 月 「ミドリイシ属サンゴの雑種に関する研究」 深見裕伸(宮崎大学農学部海洋生物環境学科)ほか:12 月まで毎月実施
- 5 月 27 日に平成 26 年度 JICA 地域別研修「アジア・大洋州地域 熱帯・亜熱帯におけるエコツーリズム企画・運営」の研修生を受け入れ、モニタリングとさんご礁修復技術を用いたさんご礁保全について講義を実施した。
- 7 月 15 日に JICA「フィリピン国際新ボホール空港建設にかかる持続可能型環境保全プロジェクト」本邦研修の一環で、さんご礁保全方針に関する講義を実施した。

-
- 10月 22日に第29回国際サンゴ礁イニシアティブ(ICRI)総会のエクスカージョンとして慶良間諸島国立公園見学ツアーが開催され、あか・げるまダイビング協会とともに対応した。
- 11月 19日に平成26年度JICA課題別研修「サンゴ礁をはじめとする沿岸生態系の保全とその持続的利用に関する総合研修」の一環として、さんご礁修復技術を活用した保全活動について講義を実施した。
- 12月 「サンゴ産卵に関する分子生物学的研究」深見裕伸(宮崎大学農学部海洋生物環境学科)

●その他の主な来所者(来所日順)

板橋俊輔(NHK沖縄放送局)ほか、澤田彩香(NHK沖縄放送局)ほか、近畿大学文化会潜水部、亀崎美沙(日本テレビ放送網)、佐藤矩行(沖縄科学技術大学院大学マリンゲノミクスユニット)ほか、三橋大樹(NHK沖縄放送局)ほか、岸秀蔵(環境省慶良間自然保護官事務所)ほか、當間秀史(沖縄県環境部)ほか、田中泰義(毎日新聞社)ほか、小池良((株)プレック研究所)ほか、石川護(座間味村役場)、赤嶺智郎(国立沖縄青少年交流の家)ほか、渡邊則仁(農林水産省水産庁漁港漁場整備部)ほか、湯山育子(国立遺伝学研究所)ほか、沖縄県立沖縄水産高等学校海洋生物系列生徒一行、東條泰大(自然環境研究センター)、井上真喜(おとひかり)、宮城杏里(琉球放送)ほか、木村匡(自然環境研究センター)、Zak Kulberg(琉球大学理学部)ほか、宮脇利充(熊本放送)、渡口みやらびにんせー会一行、小笠原敬(沖縄県環境科学センター)、Noah Idechong (Ministry of Natural Resources, Environment & Tourism, Republic of Palau National Government)、ICRIエクスカージョン一行、佐藤崇範(琉球大学国際沖縄研究所)、上原毅(喜屋武建設)、比嘉聡(東恩納組)

●AMSL刊行物

「みどりいし」No. 25

「アムスルだより」No. 125-130

●発表論文等

Iwao K, Wada N, Ohdera A, Omori M (2014) How many donor colonies should be cross-fertilized for nursery farming of sexually propagated corals? Natural Resources 5: 521-526

岩尾研二 (2014) 慶良間諸島国立公園のサンゴ礁とその保全. 国立公園 (22): 7-10